童門冬二著「小説二宮金次郎(下巻)」学陽書房、1990 年 2 月 16 日刊を読む

「俺は部分日食型になろう」

１．人間は、一人ひとりが自分の考え方を持っている。ものの見方も持っている。それは、その人なりの円だ。

２．しかし、人間の中でも個性の強い人は、自分の考えの中に、他人を取り込もうとする。そして、相手がわからないと、「あの人はバカだ」とか、「自分の考えがまったくわからない」といって、非難する。

３．それは、たとえてみれば、時に天で起こる「日食」に似ている。「日食」にも二種類ある。ひとつは、「太陽が月と完全に重なって、真黒になり、人間の生きている地上から光が消えてしまうこと」だ。「部分日食」というのは、そうではなくて、「太陽と月の一部分が重なって、光は完全に消えない」。

４．「人間の世の中でも同じではなかろうか」。
　金次郎はそう考える。つまり、指導者の中でも、「皆既日食型」と「部分日食型」があって、多くの指導者は、やはり「皆既日食」を求めているのではないかと思うのだ。それは、「指導する人々を、自分の思いどおりにしなければ気が済まない型」と、そうではなくて、「一部分で接点を保ちながらも、大部分は、お互いの自主性や、自立性を尊重しようとする型」とである。前者が「皆既日食型」であり、後者が「部分日食型」である。

５．成田山で、金次郎が考えたことは、「俺は『部分日食型』になろう」ということであった。むかしは彼も「皆既日食型」だった。精神的な潔癖症があって、個性が強いから、相手が自分の考え方の円の中に、スッポリと入ってしまわないと気がすまない。ちょっとでもはみ出す部分があるとすぐ、
「そこはこう改めなさい！と叱った。それは果たしてその相手を愛していたからなのか。それとも、自分を愛する気持ちのほうが強くて、他人が自分の言うとおりにならないと気が済まなかったのか、その辺は今になってみるとはっきりしないが、金次郎は大いに反省する。

６．それは、この頃の金次郎は、「叱ること」と「怒ること」とは、どうもちがうのではないかと思いはじめていたからだ。叱るほうには相手に対する愛情がある。怒るほうには時として、怒る側の私感情が露骨に込められる場合がある、といった認識だ。

＜コメント＞
　「積小為大」の二宮金次郎の一代記。二宮町を中心に栃木県東部や日光、茨城県西部で大活躍した二宮翁の生き方がよくわかります。

2025 年 6 月 20 日(金)